

YOSHIZUKA
吉塚13

-吉塚遺跡第16次調査報告-

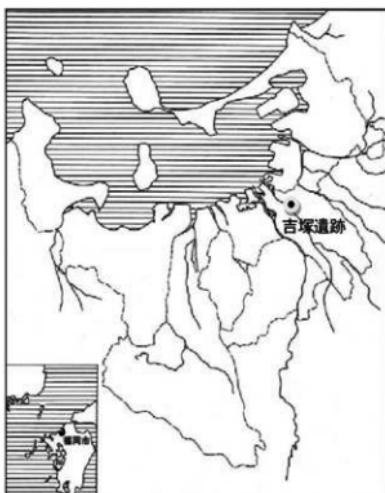
2023

福岡市教育委員会

YOSHIZUKA

吉塚13

-吉塚遺跡第16次調査報告-



遺跡略号 Y S Z - 16

調査番号 1952

2023

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面する港湾都市福岡は、太古の昔から大陸との交流の窓口として栄え、それを示す多数の埋蔵文化財が残っています。しかしこれらの埋蔵文化財は開発の進展に伴って、その一部が失われつつあるのも事実です。福岡市では工事に先立って発掘調査を実施し、後世にその成果と意義を伝えるべく、努めて参りました。

本書はホテル建設に伴い、博多区堅粕4丁目地内で実施した吉塚遺跡第16次調査の成果を収めるものです。

今回の調査では、弥生時代終末期～中世の井戸・土坑・掘立柱建物などを検出しました。

本書を通じて調査成果がより多くの方に共有され、活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、株式会社 Allest 様をはじめとする関係者の方々にはご理解と多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

令和5年3月23日

福岡市教育委員会

教育長 石橋正信

例 言

1. 本書はホテル建設に伴い、福岡市博多区堅粕4丁目404番、404番1、404番2、404番3地内において実施した吉塚遺跡第16次調査の報告である。
2. 検出遺構はピットとそれ以外のものとに分け、それぞれ通し番号とし、以下の略号を付した。
ピット S P 掘立柱建物 S B 井戸 S E 土坑 S K
3. 遺構の実測は木下博文が行った。
4. 遺物の実測は山崎龍雄・山崎賀代子が行った。
5. 遺構・遺物の写真撮影は木下博文が行った。
6. 製図は山崎龍雄が行った。
7. 本書で使用した方位は磁北で、真北より $6^{\circ} 20'$ 西偏する。
8. 本書に関わる図面・写真・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。
9. 本書の執筆・編集は木下博文が行った。

調査番号 1952	遺跡略号 Y S Z - 16	分布地図番号 036 博多駅
所在地 博多区堅粕4丁目404、404-1・2・3		調査面積 307.7 m ²
調査期間 2019.12.2 ~ 2020.2.3		

本文目次

第1章 はじめに.....	1
1 調査に至る経緯.....	1
2 調査体制.....	1
第2章 遺跡の立地と環境.....	1
第3章 調査の記録.....	5
1 調査の概要.....	5
2 遺構と遺物.....	5
井戸.....	5
土坑.....	9
掘立柱建物.....	15
その他.....	16
S P・包含層出土遺物.....	16
3 まとめ.....	18
図版1~10.....	19~28

挿図目次

図1 遺跡の位置 (S = 1/25000)	2
図2 調査地点位置図 (S = 1/2000)	3
図3 調査区位置図 (S = 1/300)	3
図4 調査区平面図 (S = 1/150)	4
図5 井戸実測図 (S = 1/60)	7
図6 井戸出土遺物実測図 (S = 1/3、1/2)	8
図7 土坑実測図1 (S = 1/60)	12
図8 土坑実測図2 (S = 1/60)	13
図9 土坑出土遺物実測図 (S = 1/3、1/2)	14
図10 S B40および出土遺物実測図 (S = 1/80、1/3)	15
図11 S P出土遺物実測図 (S = 1/3、1/2)	16
図12 包含層出土遺物実測図1 (S = 1/3)	17
図13 包含層出土遺物実測図2 (S = 1/3、1/2、1/1)	18

図版目次

図版1 1区 全景 (北西から) S E 02 (北東から) S E 03 (南東から) S E 05・06 (北東から) S E 05土層断面 (南から) S E 07 (南西から) S E 08 (北西から) S K 09・11・12 (東から)	
図版2 S K 09 (南東から) S E 10布留式甕出土状況 (西から) S E 10 (南東から) S E 13・17 (南西から) S E 13・17土層断面 (南東から) S K 14 (北西から) S K 15 (南東から) S K 16 (北西から)	

- 図版3 1区南東部 砂丘面検出状況（北西から） 1区南西部 砂丘面検出状況（北西から）
SK18（北東から） SK19（南東から） 1区 東壁土層断面（南から）
2区 全景（南東から） SK19・20・21（南西から） SK22（北東から）
- 図版4 SK23（北東から） SE24（北東から） SK25（北東から）
SK26（北東から） SK27（東から） SK28（北東から） SK30（南西から）
SK32（南西から）
- 図版5 SK33（南西から） SK34（南西から） 3区 全景（南東から）
SK36・52・49（南西から） SK37・43（北から） SE41（南東から）
SK42（南西から） SK51・55（北東から）
- 図版6 SE41、SX53（東から） SB40（南東から） SB40（北から）
- 図版7 出土遺物1
- 図版8 出土遺物2
- 図版9 出土遺物3
- 図版10 出土遺物4

第1章 はじめに

1 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、令和元（2019）年7月11日付で、株式会社Allestより博多区堅粕4丁目404、404-1・2・3地内における埋蔵文化財の有無について照会を受けた（事前審査番号 2019-2-389）。同地内は吉塚遺跡の範囲内であることから、同年7月30日に確認調査を実施し、地表面下65cmで遺物包含層、同75cmで遺構を確認した。

同地内ではホテル建設が計画されており、その基礎工事内容は残存遺構に影響を及ぼすものであることから、発掘調査を実施することとなった。

本調査は、令和元（2019）年12月2日にバックホウによる表土剥ぎより着手した。12月4日より人力による掘り下げを開始、順次遺構の検出・精査・写真撮影・実測を進め、令和2（2020）年2月3日に機材を撤収し終了した。

2 調査体制

調査委託 株式会社Allest

調査主体 福岡市教育委員会

（発掘調査 令和元年度 資料整理 令和2～4年度）

調査総括	経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課長	菅波 正人（令和元～4年度）
	同課調査第1係長	吉武 学（令和元・2年度）
庶務	文化財活用課管理調整係	本田 浩二郎（令和3・4年度） 松原 加奈枝（令和元・2年度） 井手 瑞江（令和3年度） 内藤 愛（令和3・4年度）
事前審査	埋蔵文化財課事前審査係長	本田 浩二郎（令和元・2年度） 田上 勇一郎（令和3・4年度）
	同課事前審査係主任文化財主事	田上 勇一郎（令和元・2年度） 森本 幹彦（令和3・4年度）
	同課事前審査係	朝岡 俊也（令和元年度） 山本 晃平（令和2・3年度） 三浦 悠葵（令和4年度）
調査担当	埋蔵文化財課調査第1係	木下 博文

第2章 遺跡の立地と環境

吉塚遺跡は、御笠川の右岸、博多湾岸に並ぶ砂丘群の一画に立地する。現在の福岡市博多区堅粕4・5丁目および吉塚3丁目一帯に広がる。現地表面の標高は3～4mである。遺跡の北西側に南から堅粕、吉塚本町の各遺跡が並び、御笠川を挟んで西に博多遺跡群が立地する。

吉塚祝町遺跡1次調査では、最古の遺構として弥生時代中期中葉の小児棺からなる甕棺墓群が確認されており、それに関わる集落域の特定が望まれている。

堅粕遺跡8次調査では、古墳時代前期の祭祀遺構が確認されている。土師器壺に滑石製白玉・管玉が綴られた状態で入れられており、壺の周囲からも劍形石製品や多数の玉が出土している。

吉塚遺跡内では、過去に15次の調査が実施されており、地点は北東端部、中央部、南西端部に集中している。今回の調査地点は中央部のやや南西寄りに位置し、南東に2次、南西に3次、一区画挟んで北西に4次の各調査地点が位置する。

南西部の御笠川に近い1次調査では、古墳時代前期の土器群を検出、中国・新の貨泉銭や銅鏡が出土している。滑石製白玉25点が入った須恵器壺など古墳時代後期の遺構・遺物も注目に値する。

南東隣の2次調査では、古墳時代後期の遺構が多く検出されている。特に注目される遺物としては須恵器の形態・製作技法を模倣した土師器が多量に出土している。このような「赤焼土器」は玄海灘沿岸地域を中心に出土し、埋葬・祭祀遺構から出土することが多いとされている。

南西隣の3次調査では、古代・中世前半の遺構が主体となっている。

北西の4次調査では、弥生時代後期と中世前半の遺構が主として確認され、古墳時代前期の遺構・遺物、庄内・布留式系上器がほとんど見られないことが明らかになっている。

擾乱の影響もあるが、各地点で主体となる遺構・遺物の時期に違いが見えることに注意が必要となる。

吉塚祝町1次 「吉塚祝町1」福岡市埋蔵文化財調査報告書第624集 2000

堅粕8次 「堅粕3」福岡市埋蔵文化財調査報告書第590集 1999

1次 「吉塚1」福岡市埋蔵文化財調査報告書第202集 1989

2次 「吉塚2」福岡市埋蔵文化財調査報告書第464集 1996

3次 「吉塚3」福岡市埋蔵文化財調査報告書第553集 1998

4次 「吉塚4」福岡市埋蔵文化財調査報告書第552集 1998

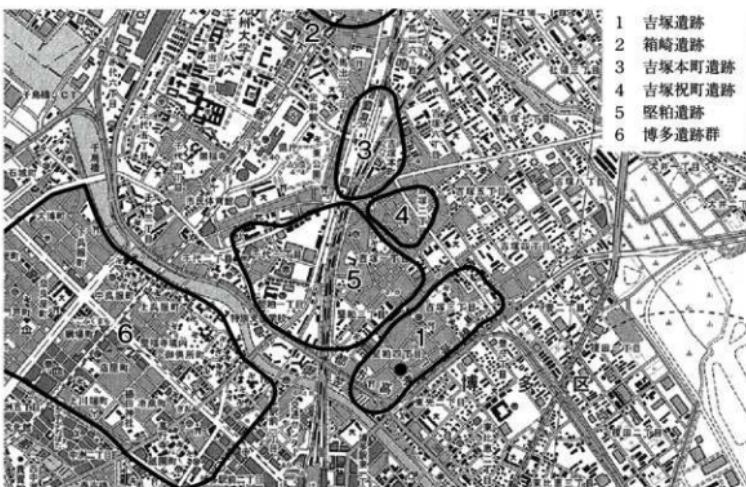


図1 遺跡の位置 ($S = 1 / 25000$) ドットは調査地点

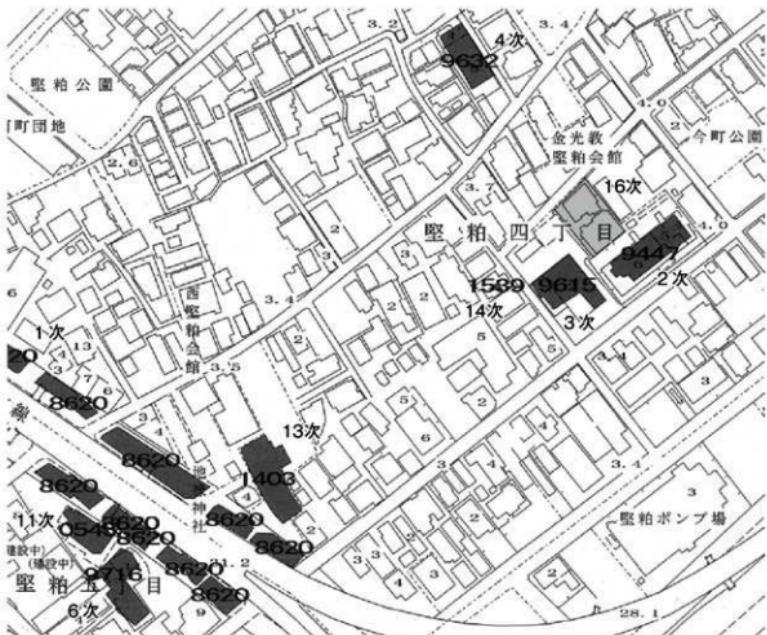


図2 調査地点位置図 ($S = 1 / 2000$)

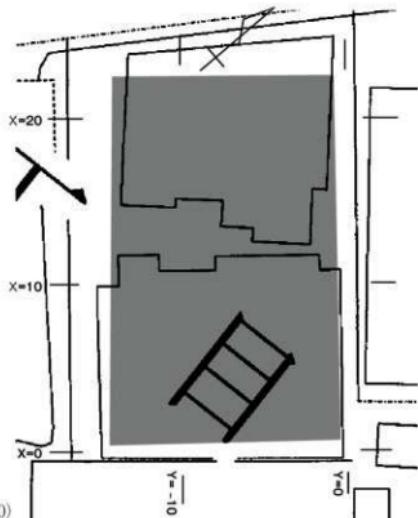


図3 調査区位置図 ($S = 1 / 300$)

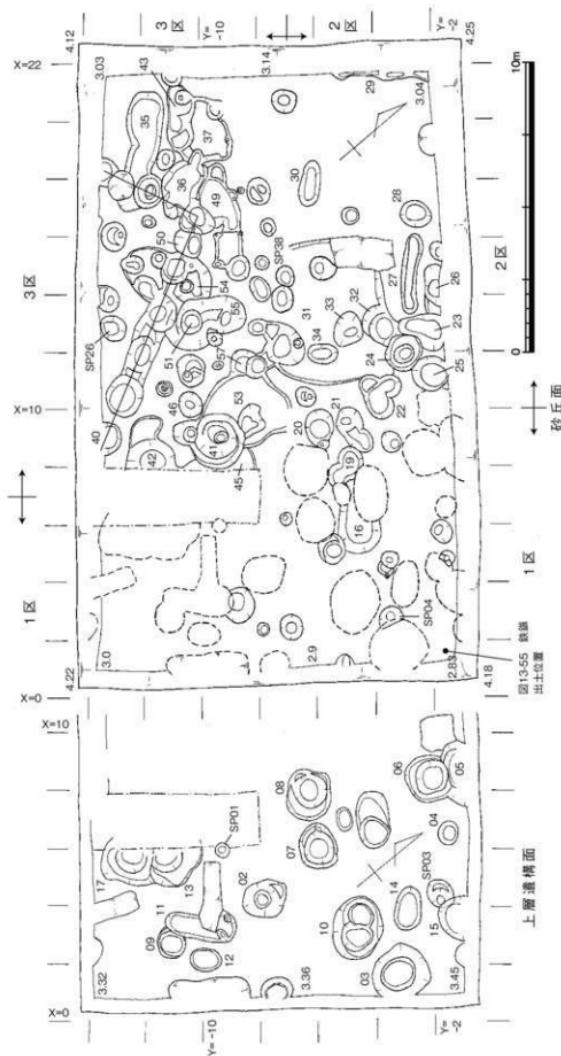


图4 调查区平面图 ($S = 1 / 150$) 小数点数字为标高

第3章 調査の記録

1 調査の概要

本調査地点は、遺跡の中央部やや南西寄りに位置し、現地表面の標高は41~43mである。排土処理のため、3区画に分け調査した。調査区の南東部を1区、北東部を2区、北西部を3区としたが、排土量が多く、安全上の引きを取ったことにより、1区と3区の反転境界で一部未調査箇所が生じてしまった。

土層は確認調査の所見によると、建物解体時の廃棄物を含む現代客土（現地表面下35cmまで）、暗褐色砂質土（同75cmまで 遺物包含層）、茶褐色砂（同95cmまで 遺構検出面）、黄白色細砂となつており、周辺遺跡と同様砂丘面が地山である。

南寄りの1区では現地表面下80cmまで表土を剥いだところ、遺構を確認できたものの、かなり認識しにくい状況であった。また遺構を掘り下げ壁面を精査した結果、上部はまだ遺物包含層であることが明確になり、遺構精査後に現地表面下120cmの黄褐色砂丘面まで遺物包含層を人力で掘り下げた。その結果特に南東部において、完形品を含む古墳時代初頭の小型丸底壺、飯蛸壺が出土した。それにより想定外の手間を要したため、2・3区では調査期間の制約と遺物包含層の薄さ、遺物包含量の少なさから黄褐色砂丘面まで直接下げる。砂丘面の標高は、調査区南壁で28~30m、北壁で30~31mである。

検出遺構は井戸、土坑、掘立柱建物、ピットである。出土遺物は弥生時代終末～中世の土器を主体に、特筆すべきものとして、滑石製の有孔円板・玉、鐵鎌がある。出土遺物量はコンテナ40箱分である。

遺構はピットとそれ以外に分け、それぞれ通し番号とした。

2 遺構と遺物

井戸

S E02（図5、図版1）

1区で検出。1.6×1.35mの楕円形で、深さ1.2m余り。

出土遺物（図6、図版7）

1は須恵器杯身。口径11.2cm、器高4.2cm、受部径13.7cm。オリーブ黒色を呈し、底部外面は時計回りの回転ヘラ削りで、ヘラ記号がある。2は土師器の瓶。口径28.0cm、器高29.5cm、底径19.2cm。淡橙色を呈し、外面は本目直交のタタキ目、内面はハケ目を施す。

S E03（図5、図版1）

1区南東部、調査区南壁際で検出。2.0×1.77mの不整円形で、深さ1.2m余り。

出土遺物（図6）

3は丹塗り土器の短頸壺。復元口径10.0cm、残存高3.6cm、外面は明赤褐色を呈す。

S E05（図5、図版1）

1区、調査区東壁際で検出。S E06を切る。径2.25mの円形で、深さ1.3m余り。

出土遺物（図6）

4は土師器の高杯。復元口径17.0cm、残存高5.5cm。外面はにぶい橙色、内面はオリーブ黒色を呈し、外面にハケ目を施す。口縁部に部分的に煤が付着する。

S E06 (図5、図版1)

1区で検出。S E05に切られる。径1.6mの円形で、深さ1.4m。

出土遺物 (図6、図版7)

5は須恵器杯身。口径11.3cm、残存高3.9cm、受部径13.4cm。6は古式土師器の高杯脚部。底径12.4cm、残存高8.2cm。橙色を呈し、外面に丁寧なヘラミガキ、内面に細かいハケ目を施す。2ヶ所に径0.9cmの穿孔がある。

S E07 (図5、図版1)

1区で検出。1.6×1.26mの楕円形で、深さ1.5m余り。

出土遺物 (図6、図版7)

7は手捏土器の鉢。口径6.2cm、にぶい褐色を呈す。8は弥生土器の壺。復元口径17.0cm、残存高7.3cm、にぶい黄褐色を呈し、体部内外面にハケ目を施す。他に叩き石が2点出土している。

S E08 (図5、図版1)

1区で検出。1.5×1.75mの楕円形で、深さ1.4m弱。

S E10 (図5、図版2)

1区東半で検出。2.2×1.7mの楕円形で、深さ1.2m余り。当初切り合いを認識できず、同一遺構として掘り下げていたが、最終的に井戸側の据え付け跡とみられる円形プランが2ヶ所見られたことから、2基の円形井戸が切り合ったもの可能性がある。遺物の取り上げは途中から北寄りを10-1、南寄りを10-2として取り上げた。10-1の中層で布留式壺がほぼ完形で出土している。古墳時代前期に位置づけられる。

出土遺物 (図6、図版7)

9は古式土師器の小型器台の受部。復元口径11.2cm、残存高2.1cm、にぶい黄褐色を呈し、内外面にヘラミガキを施す。10は土師器の壺。復元口径17.2cm、残存高24.8cm、胴部最大径22.5cm、橙色を呈し、体部外面に細かいハケ目、同内面に削り、頸部内外面に指押さえを施す。11は用途不明土製品。長さ32cm、幅1.8cm、最大厚1.2cm、にぶい橙色を呈し、2ヶ所に径0.3cmの穿孔がある。

S E13 (図5、図版2)

1区西半で検出。径1.75m以上、深さ1.8m弱。S E17を切る。反転時に排土量と作業上の安全を考慮し法面を取ったことから、3区との境界で空白部が生じてしまい、北西側のプランを確認できなかった。土層断面より円形の井戸側痕跡が確認できる。

出土遺物 (図6、図版7)

12はミニチュア土器の壺。口径4.2cm、器高4.0cm、にぶい赤褐色を呈し、一部にハケ目が残る。

S E17 (図5、図版2)

1区西半で検出。径1.5m以上、深さ1.1m。S E13に切られる。

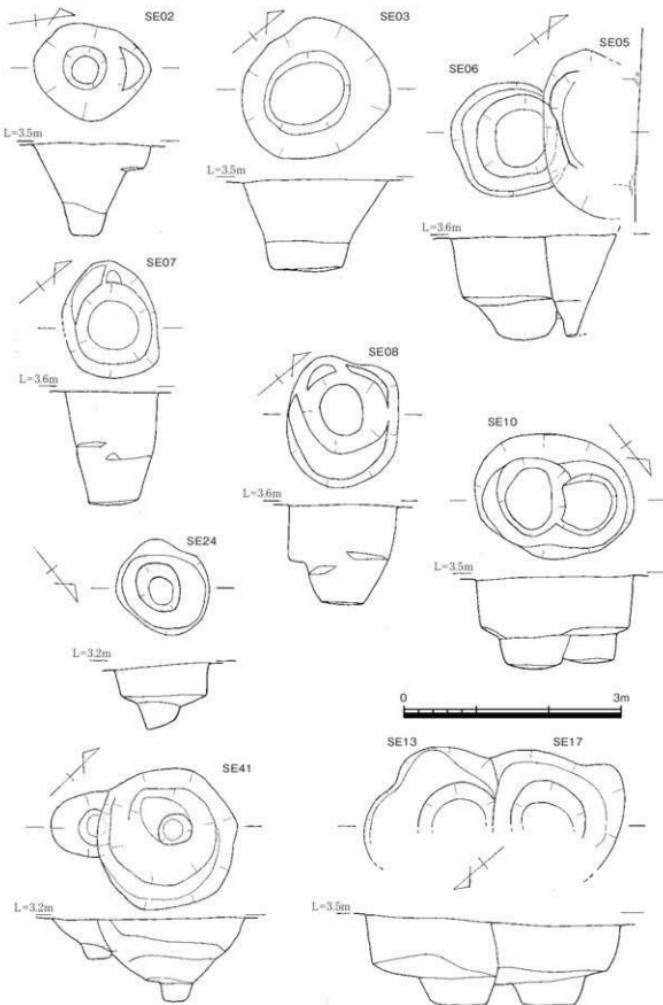


図5 井戸実測図 ($S = 1 / 60$)

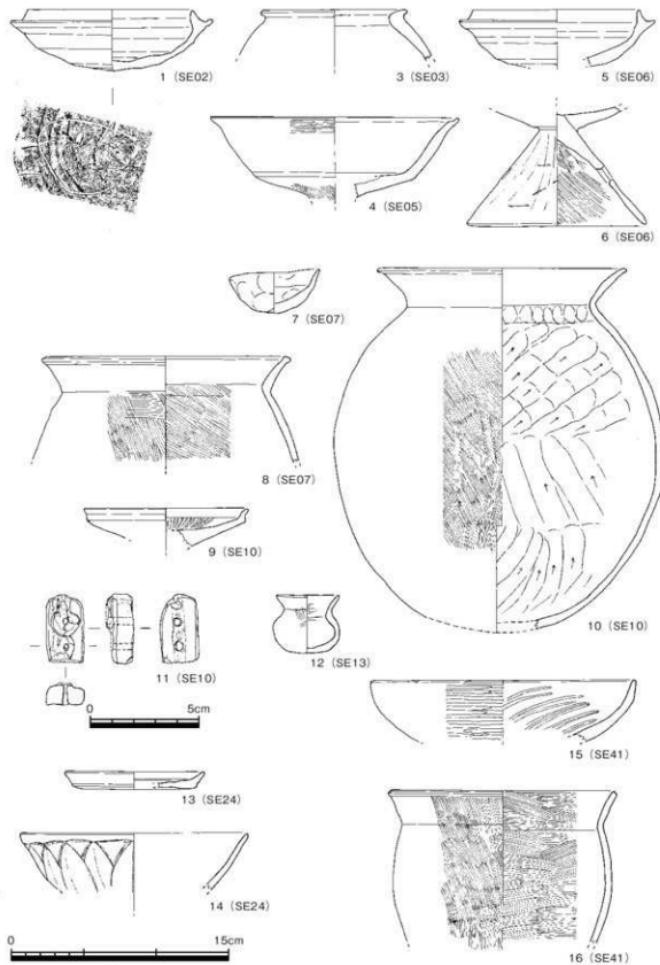


図6 井戸出土遺物実測図 ($S = 1/3, 1/2$)

S E24 (図5、図版4)

2区南東部で検出。径1.3mの円形で、深さ0.8~0.9m。底部中央に0.7×0.55m、深さ0.4mの楕円形プランがあり、井戸側の痕跡か。

出土遺物（図6）

13は土師器皿。復元口径9.6cm、橙色を呈し、底部外面は回転糸切り。14は龍泉窯系鎬蓮弁文青磁碗II-bかC類。

S E41 (図5、図版5)

3区南端で検出。S X53、SK 45・46を切る。径1.9mの円形で、深さ1.1m強。底部中央に0.5×0.4m、深さ0.2mの楕円形プランがあり、井戸側の痕跡とみられる。埋土が灰褐色砂質土で、埋土が暗茶褐色砂の他の遺構を切っており、検出遺構の中では新しい部類に含まれる。

出土遺物（図6）

15は土師器碗。復元口径18.2cm、残存高4.2cm、橙色を呈し、内外面にヘラミガキを施す。16は弥生土器の甕。復元口径17.8cm、残存高10.5cm、にぶい橙色を呈し、内外面に細かいハケ目を施す。

土坑

SK01 (図4)

1区西半で検出。深さ0.6m。SK 17に切られる。

出土遺物（図9、図版8）

17・18は弥生土器の甕。17は復元口径21.8cm、器高29cm、にぶい橙色を呈す。18は口径17.2cm、器高21.5cm、にぶい橙色～暗灰色を呈す。いずれも内外面にハケ目を施し、胴部外面に黒斑がある。底部はレンズ状である。19は弥生土器の支脚。復元底径9.2cm、残存高9.7cm、にぶい橙色を呈し、内外面にハケ目、上端面はなでを施す。

SK09 (図7、図版2)

1区西半で検出。径1.0mの円形で、深さ0.9m弱。SK 11に切られる。

出土遺物（図9、図版8）

20は土師器皿。復元口径10.1cm、器高1.5cm、黄灰色を呈し、底部外面は回転ヘラ切りで板状圧痕が残る。21は土師器杯。復元口径15.4cm、器高4.2cm、灰褐色を呈し、底部外面は回転ヘラ切りで板状圧痕が残る。22はねじり巻き状の土製品。残存長4.4cmで緑黒色を呈す。

SK11 (図7、図版1)

1区西半で検出。SK 09、SK 18を切る。長さ2.5m、幅0.8mの長楕円形で、深さ0.4~0.5m。

SK12 (図7、図版1)

1区西半、SK 11の南東で検出。1.1×0.75mの楕円形で、深さ4~8cm。

SK14 (図7、図版2)

1区東半で検出。1.55×0.9mの楕円形で、深さ0.6m余り。

出土遺物（図9、図版8）

23は手捏土器の鉢。復元口径8.1cm、器高6.3cm、黄灰色を呈し、内外面指押さえを施す。

S K15（図7、図版2）

1区東半、東壁際で検出。径1.55m以上、深さ0.6m。

出土遺物（図9、図版8）

24は土器器の甌。最大胴部径8.0cm、残存高7.5cm、にぶい橙色を呈し、胴部下半に黒斑がある。内外面なでを施す。25は飯蛸壺。口径5.8cm、残存高8.7cm、にぶい橙色を呈す。26は古式土師器の壠。復元口径12.0cm、器高6.2cm、明赤褐色を呈し、外面は横方向の密なヘラミガキ、内面は口頸部に縦方向の細いハケ目の後ミガキ、胴部に指押さえ・なでを施す。

S K16（図7、図版2）

1区で検出。1.95×1.18mの楕円形で、深さ1.0m。

出土遺物（図9、図版8）

27は土器小片。にぶい橙色を呈し、片面にS・円状のスタンプ文、もう片面に細いハケ目を施す。山陰系か。28は土師器の広口壺。復元口径12.6cm、器高12.0cm、にぶい橙色を呈し、外面は縦横方向の密なヘラミガキ、内面は頸部以下に細いハケ目を施す。

S K18（図7、図版3）

1区西半で検出。径1.15mの円形で、深さ0.6m。SK11に切られる。

S K19（図4、図版3）

1区で検出。1.1×0.85mの楕円形で、深さ0.4m。SK21を切る。

S K20（図7、図版3）

1区で検出。1.3×0.98mの楕円形で、深さ0.3m余り。

S K21（図7、図版3）

1区東半で検出。1.77×0.95mの不整楕円形で、深さ0.5m。

S K22（図7、図版3）

1区で検出。1.65×0.9mの不整楕円形で、深さ0.4m弱。

S K23（図7、図版4）

2区で検出。1.7×1.25mの不整楕円形で、深さ0.4m弱。

S K25（図7、図版4）

2区で検出。1.3×1.2mの円形で、深さ0.5m弱。

S K26（図7、図版4）

2区、調査区東壁際で検出。長さ1.75m以上、幅0.6m以上で、深さ0.4m余り。

S K27 (図7、図版4) 2区で検出。長さ2.8m、幅0.5mで、深さ0.2m余り。

S K28 (図8、図版4) 2区で検出。1.1×0.9mの楕円形で、深さ0.3m余り。

S K30 (図8、図版4) 2区で検出。1.57×0.7mの楕円形で、深さ0.3m余り。

S K32 (図8、図版4) 2区で検出。1.5×1.3mの楕円形で、深さ0.4m余り。

S K33 (図8、図版5) 2区で検出。1.28×1.0mの楕円形で、深さ0.4m。

S K34 (図8、図版5) 2区で検出。1.03×0.65mの楕円形で、深さ0.2m。

S K35 (図8、図版5) 3区で検出。長さ4.24m、幅1.23m、深さ5cm。

S K36 (図8、図版5)

3区で検出。2.1×1.3mの楕円形で、深さ0.3~0.4m。

S K37 (図8、図版5)

3区で検出。長さ2.25mの不整形で、深さ0.2m余り。S K43に切られる。

S K42 (図8、図版5)

3区で検出。径2.0mで、深さ0.5m。

出土遺物 (図9、図版8)

29は弥生土器の複合口縁壺。復元口径19.2cm、にぶい黄橙色を呈し、外面に櫛描波状文を施す。

S K43 (図8、図版5)

3区で検出。長さ2.3m、幅0.95mの長楕円形で、深さ0.5m弱。S K37を切る。

S K46 (図5、図版5)

3区で検出。0.8以上×0.85mの楕円形で、深さ0.55m。S E41に切られる。

S K49 (図8、図版5)

3区で検出。長さ2.4m、幅1.3mの不整形で、深さ0.3m余り。

S K51 (図8、図版5)

3区で検出。径1.8m、深さ0.85m。中央部に0.75×0.8m、深さ0.4mの円形プランがあり、円形の井戸側を持つ井戸の可能性もある。S K55と接し、プランは不明である。

S K55 (図8、図版5)

3区で検出。径1.25mの円形で、深さ0.5m。S K51と接し、プランは不明である。

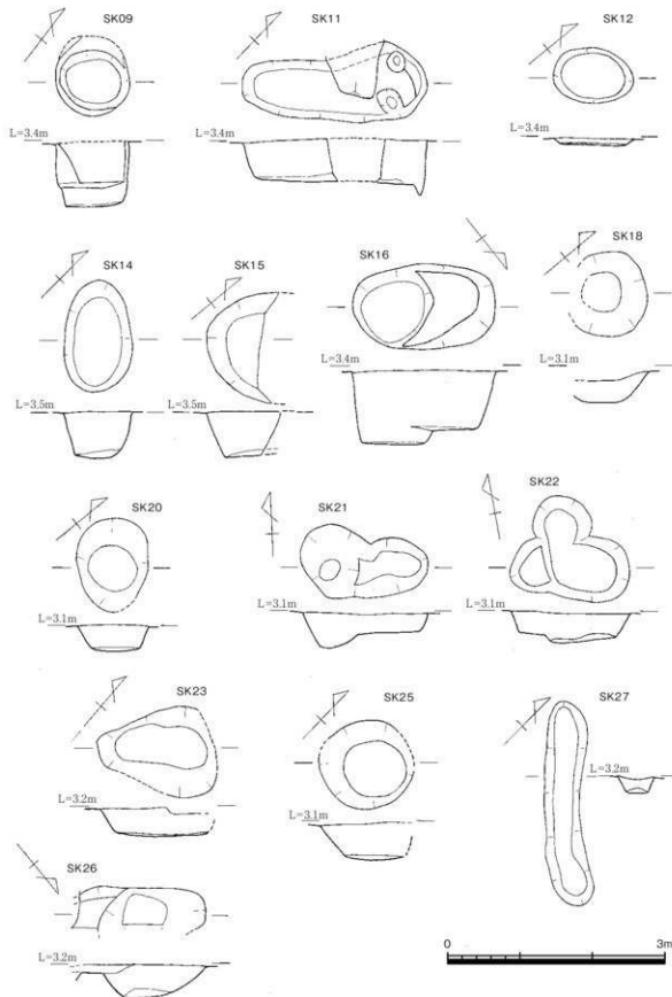


図7 土坑実測図1 ($S = 1/60$)

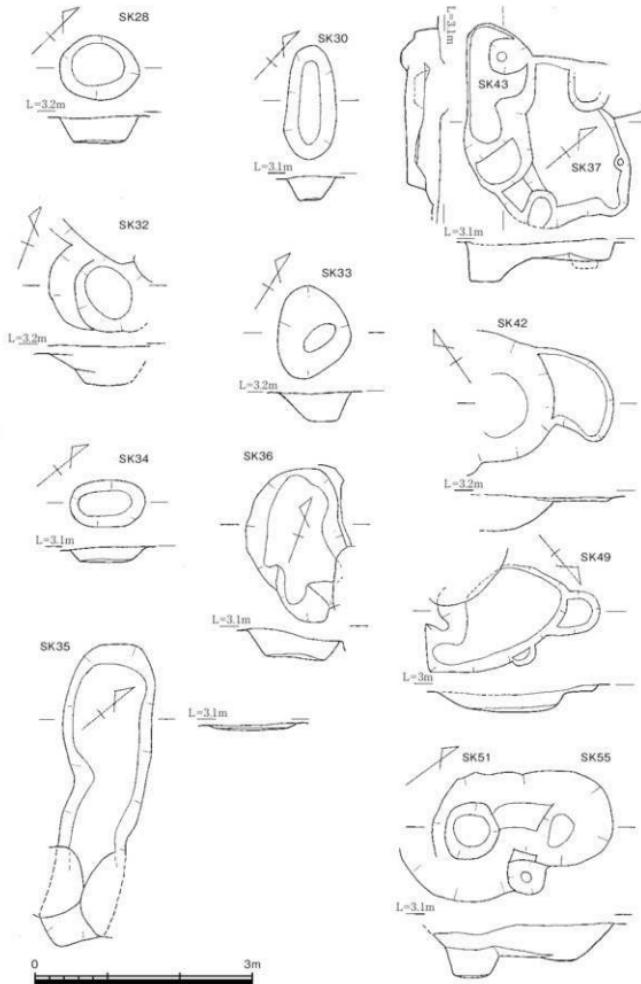


図8 土坑実測図2 (S = 1 / 60)

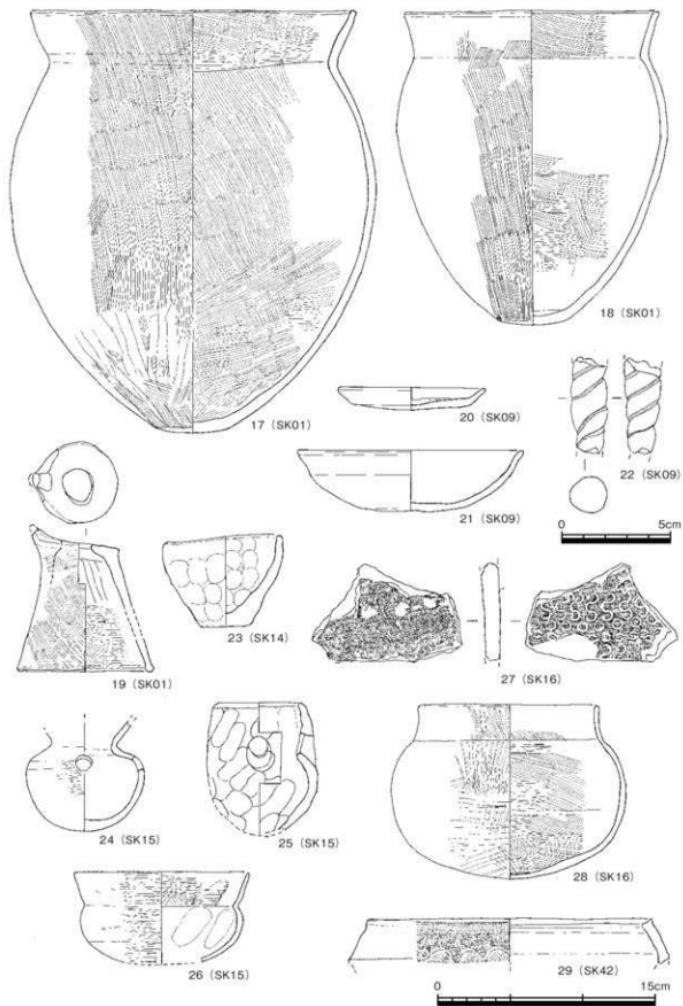


图9 土坑出土遗物実測図 (S = 1 / 3、1 / 2)

振立柱建物

S B 40 (図10、図版6)

3区、調査区西壁際で検出。東西2間以上、南北5間以上で、建物主軸は磁北より 27° 西偏する。柱穴は径1.2mの円形で深さ0.5~0.6m、柱間寸法は1.6~1.9mで、東側南北柱列は一部布掘り状を成している。柱穴より完形の須恵器蓋杯の身が出土しており、古墳時代後期に位置づけられる。出土遺物 (図10、図版8)

30・31は須恵器で、30は蓋、31は杯身。30は復元口径13.8cm、器高3.8cm。31は復元口径12.2cm、受部径14.5cm、器高3.8~4.3cm、ろくろ回転は反時計回り、IV A期とみられる。いずれもS P 48出土。32は土師器の壺。復元口径12.8cm、残存高6.3cm、明赤褐色を呈す。

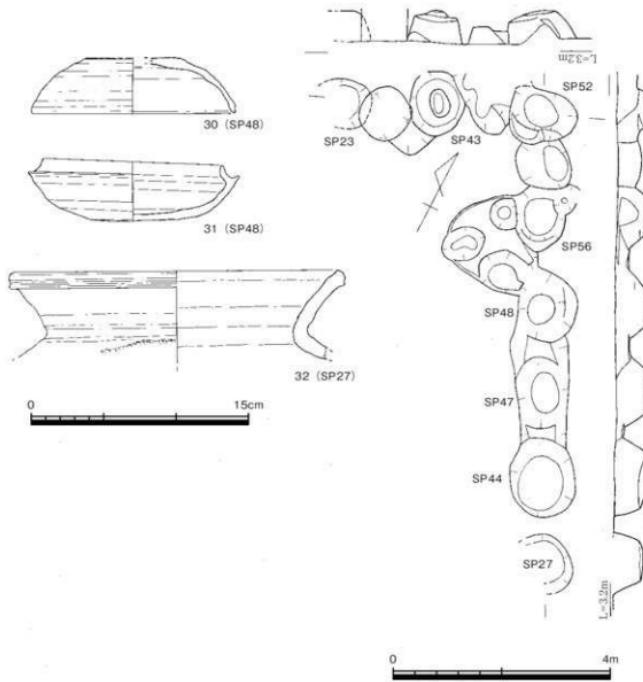


図10 S B 40 および出土遺物実測図 (S = 1/80, 1/3)

その他

S X45（図4） 3区で検出。径26mの円形で、深さ0.1m。S E41に切られる。底面は平坦である。

S X53（図4、図版2）

3区で検出。幅295mの不整形で、深さ0.2m余り。S E41に切られる。底面は平坦である。

S P出土遺物（図11、図版8）

33は飯蛸壺。1区S P01出土。34は手捏土器の鉢。1区S P03出土。35は土師器の甕。1区S P03出土。36は弥生土器の袋状口縁壺。1区S P04出土。37は弥生土器の甕。3区S P26出土。38は滑石製有孔円板。径27cm、厚さ0.3cm。2ヶ所の穿孔と表面に擦痕がある。3区S P38出土。

包含層出土遺物（図12・13、図版9・10）

33・40は土師器の小型丸底壺。41・42は飯蛸壺。43は土師器の椀。44は手捏土器の鉢。45は弥生土器の甕口縁部。橙色を呈し、口縁部外面に2本の波線とヘラ三角鋸歯文、それ以外は内外面粗いハケ目を施す。46は土師器の二重口縁壺。47は弥生土器の複合口縁壺。にぶい橙色を呈し、口縁部外面に櫛搔波状文、頸部の突帯の上に櫛搔刻み目、それ以外は内外面ハケ目を施す。48は土師器の二重口縁壺。灰黄色を呈し、肩部に径7~8mmの竹管文が7ヶ所入る。体部外面はハケ目、内面はヘラ削りを施す。49は土師器の布留式甕。50は土師器の鉢。橙色を呈し、底部外面と内面上半にハケ目を施す。51は有溝石錘。長さ4.8cm、幅2.3cm。52は有溝土錘。明赤褐色を呈し、長さ5.4cm、重さ21.5g。53は滑石製有溝錘。長さ4.3cm、幅1.8cm。54は砥石片。長さ7.5cm、最大幅1.8cm。55は鉄鎌。長さ8.3cm。木質が一部残る。56はガラス小玉。径4mm、孔径1.5mm、緑灰色を呈す。57は滑石製小玉。径5mm、孔径2mm。58は滑石製有孔円板。2.5×2.7cm、厚さ0.4cm。59は土師器の甕の蒸気孔。橙色を呈し、片面にタタキ痕がある。

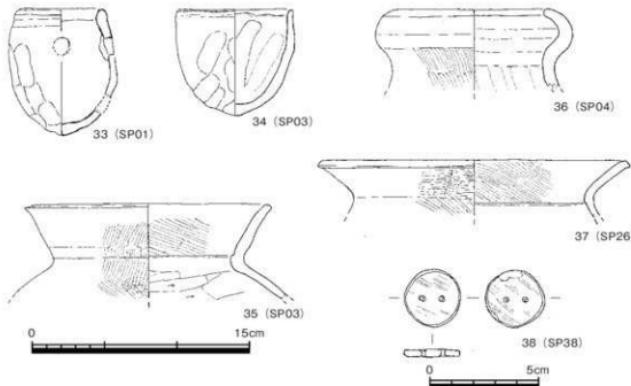


図11 S P出土遺物実測図 (S = 1/3, 1/2)

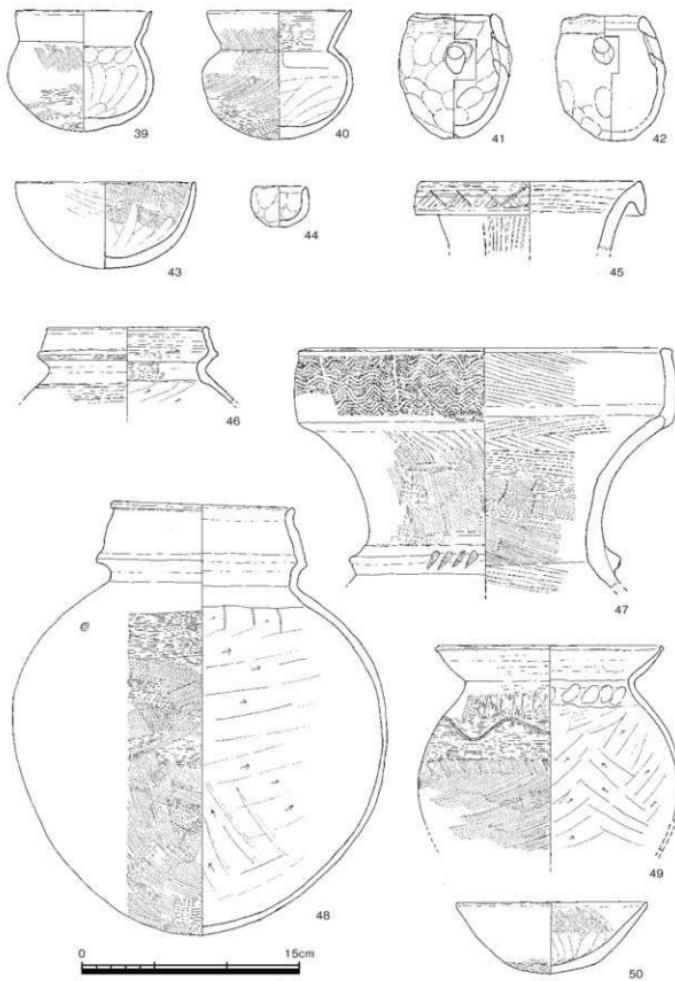


图12 包含层出土遗物实测图1 ($S = 1 / 3$)

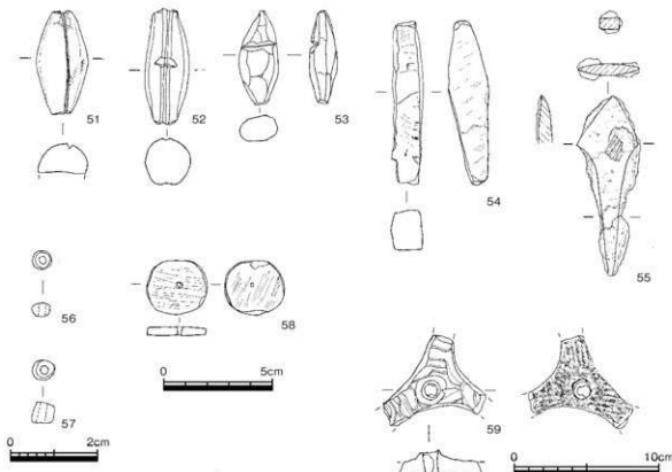


図13 包含層出土遺物実測図2 (S = 1/3, 1/2, 1/1)

3まとめ

今回の調査では、古墳時代前期・後期を中心とする遺構・遺物を検出した。

2次調査に近い1区南東隅部では包含層が残り、古墳時代前期の完形土師器壺群、鉄錐が出土した。黒を基調とする土で、平面上ではプランが見えなかった。祭祀に伴うもの可能性がある。この他に井戸も同時期のものを検出している。4次調査では古墳時代前期の遺構・遺物、特に庄内・布留式土器がほとんど見られないと対照的な様相である。

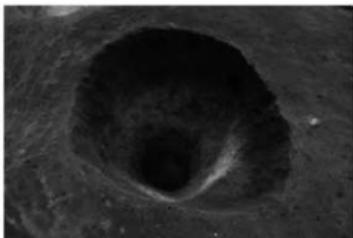
調査区北西部の3区壁際で検出した南北方向の2×5間以上の掘立柱建物S B40は、柱穴より須恵器蓋杯が出土したことから、古墳時代後期とみられる。南西隣の3次調査では、南半部の擾乱が激しいためか、この建物の続きや関連遺構は確認されていない。南東隣の2次調査では、東西方向の掘立柱建物S B73、南北方向の掘立柱建物S B75、それらの間に東西方向の欄列S A74が検出されている。S B73は1×7間の長大な建物で、時期は古代と推測されているが、図示遺物には須恵器蓋杯があり、古墳時代後期の可能性があるのではなかろうか。S B75についても古墳時代後期に遡る可能性が記述されている。これら3棟の建物は間連がありそうではあるが、建物の軸が違うところもあるため、今後の周辺の調査成果に俟ちたい。

今回の調査地点は、古墳時代前期の集落域にあたり、同後期には大型の掘立柱建物を中心をなす区域に変わっていたことが明らかになった。遺跡内中央部における調査はまだ少ない。今後さらに調査事例が増えれば、遺跡内での各時代の利用変遷が鮮明になるであろう。

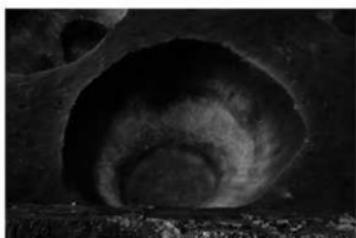
図版 1



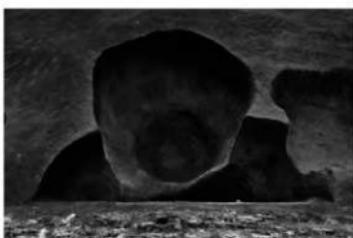
I区全景（北西から）



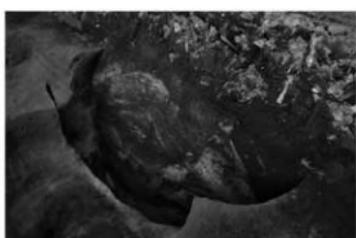
S E 02 (北東から)



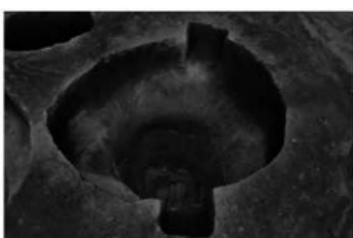
S E 03 (南東から)



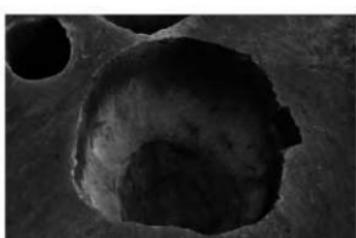
S E 05・06 (北東から)



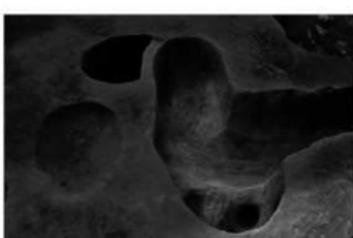
S E 05土層断面 (南から)



S E 07 (南西から)

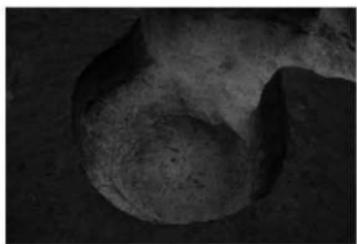


S E 08 (北西から)

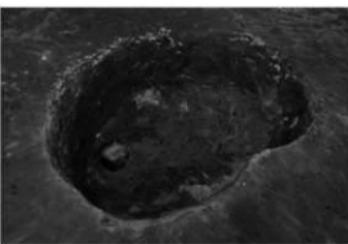


S K 09・11・12 (東から)

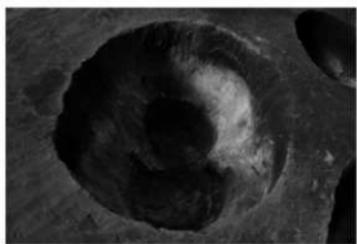
図版2



S K09 (南東から)



S E10布留式甕出土状況 (西から)



S E10 (南東から)



S E13・17 (南西から)



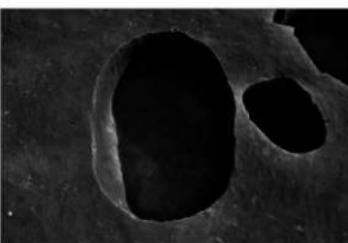
S E13・17土層断面 (南東から)



S K14 (北西から)

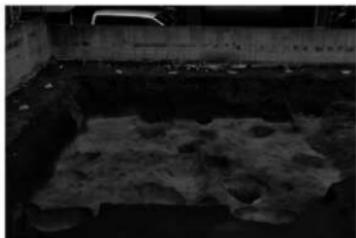


S K15 (南東から)

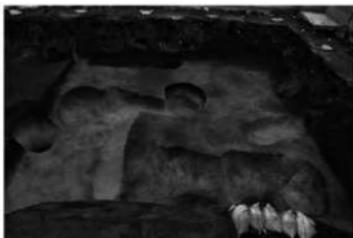


S K16 (北西から)

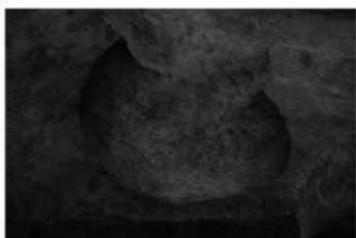
図版3



1区南東部 砂丘面検出状況（北西から）



1区南西部 砂丘面検出状況（北西から）



SK 18（北東から）



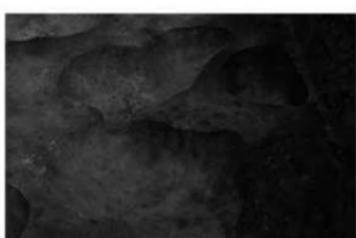
SK 19（南東から）



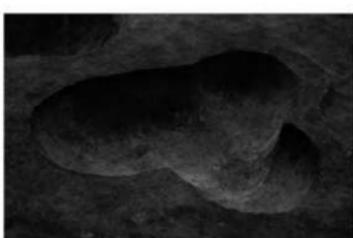
1区 東壁土層断面（南から）



2区 全景（南東から）

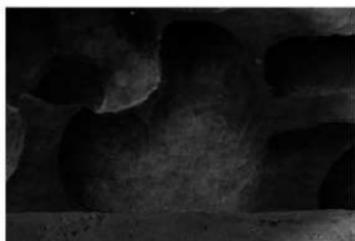


SK 19・20・21（南西から）

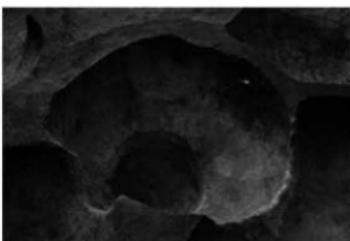


SK 22（北東から）

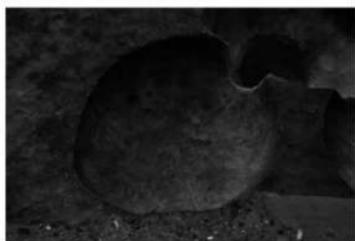
図版 4



S K23 (北東から)



S E24 (北東から)



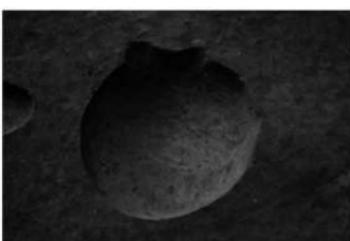
S K25 (北東から)



S K26 (北東から)



S K27 (東から)



S K28 (北東から)



S K30 (南西から)

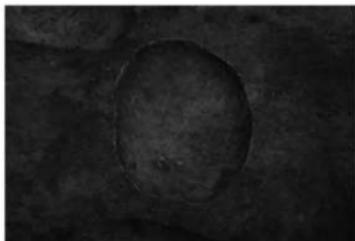


S K32 (南西から)

図版 5



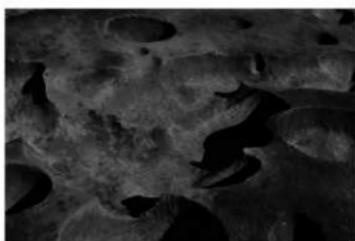
S K33 (南西から)



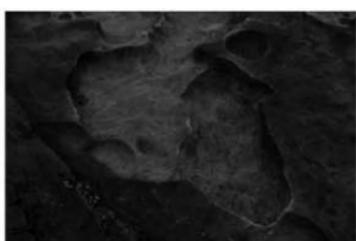
S K34 (南西から)



3区 全景 (南東から)



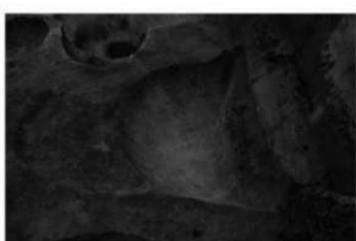
S K36・52・49 (南西から)



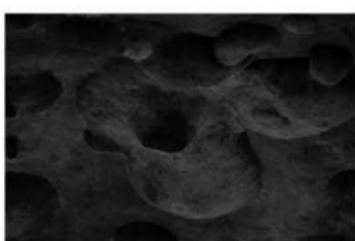
S K37・43 (北から)



S E41 (南東から)

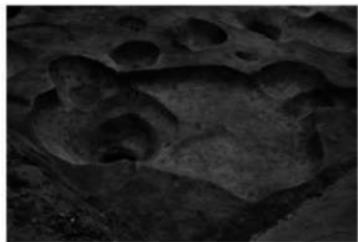


S K42 (南西から)



S K51・55 (北東から)

図版 6



S E 41、S X 53 (東から)



S B 40 (南東から)



S B 40 (北から)

図版 7



出土遺物 1

図版 8



出土遺物 2

図版9



39



40



44



41



43



42



45



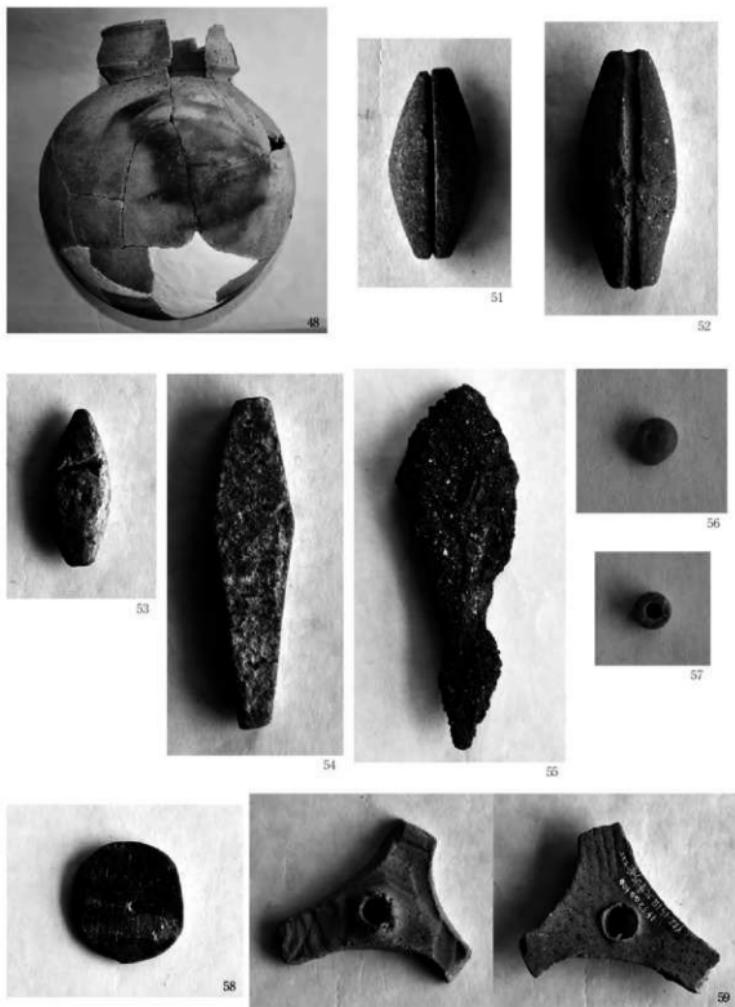
46



47

出土遺物3

図版 10



出土遺物 4

報告書抄録

ふりがな 書名	よしづか 吉塚 13							
副書名	吉塚遺跡第16次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第1492集							
編著者名	木下博文							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1							
発行年月日	2023年3月23日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
吉塚遺跡第16次	福岡市博多区堅粕 4丁目404、 404-1・2・3	40132	0123	33度 35分 45.58秒	130度 25分 30.96秒	2019.12.02 ～ 2020.02.03	307.7 m ²	記録保存 調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
吉塚遺跡	集落跡	弥生～中世	井戸、土坑、 掘立柱建物	弥生土器、土師器、 須恵器、滑石製品、 鉄器				
要約	吉塚遺跡は、御笠川の東岸、博多湾岸に並ぶ砂丘群の一画に立地し、現地表面の標高は標高3～4mである。調査地点は遺跡中央部のやや南西寄りに位置し、南東隣地に2次、南西隣地に3次、北西に4次調査地点が位置する。遺構は現地表面から12m下の黄褐色砂丘面で検出し、弥生時代終末期～中世の井戸・土坑・柱穴を検出した。特に調査区北西端では、ほぼ南北に近い南北方向の掘立柱建物1棟を検出した。遺物は弥生時代終末期～中世の土器片のほか、小形丸底壺や飯蛸壺の完形品、滑石製の有孔円板なども出土した。							

吉塚 13

-吉塚遺跡第16次調査報告-
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1492集
2023（令和5）年3月23日

発行 福岡市教育委員会
〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1
印刷 三栄印刷株式会社
〒812-0044 福岡市博多区千代1-6-1

